

学習目標、指導プロセスを明確化する

新課程がスタートするまで3年。「総合的な学習の時間」は新課程の中でも注目度が高いが、新しい試みだけに高校現場には戸惑い、不安の声も少なくないようだ。この連載では、「総合的な学習の時間」の展開について具体的に探っていききたい。第1回はカリキュラム作りの進め方とポイントについて考える。

「総合的な学習の時間」(以下「総合学習」)のカリキュラム作りを考える前に、その概要、予想される活動内容、課題について確認してみたい。

「総合学習」は、新学習指導要領の柱の一つである「生きる力を育てる」を、学習活動レベルに凝縮したものと考える。「総合学習」のねらいは、課題発見力、解決力を育てること、問題の解決や探究活動に主体的に取り組み、自己の在り方、生き方を考えられるようにすることにある。

文部省は「総合学習」の学習活動例

- として次の三つを挙げている。
1. 国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動
 2. 興味・関心、進路等にに応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動
 3. 自己の在り方、生き方や進路について考察する学習活動

いる高校と、「まだ全く検討していない」「今後検討しなければならぬ」という段階の高校がほぼ半数ずつあり、検討状況には高校間格差が見られるようだ。また、各教師の個人的見解、見通しとして、「地域からの期待を考えると、生きる力を育成しつつ、さらに進学にも生きる取り組みが望ましい」という意見が多い。

これに文部省が提示した学習活動例などを重ねると、進学希望者の多い高校では、進路学習や小論文指導とリンクしながら行える学習活動が、「総合学

習」の主流になっていく可能性が高いと考えられる。進路学習や小論文については既に何らかの形で行っている高校が多く、比較的「総合学習」に導入しやすいことが、こうした予想の裏付けになっていると言えよう。

生徒と共に学ぶスタンスが求められる

一方、「総合学習」における課題としてはどんなものがあるだろうか。調査によると、代表的な声には次の四つが挙げられそうだ。

- a. 新学習指導要領に「学校の独自性を出す」という趣旨があるが、何をどのようにすればよいのか分からない。
 - b. 新しい取り組みのため、全くゼロの所から作り上げていかなければならず、相当負荷がかかるのではないかと懸念されている。
 - c. 教科書がない「総合学習」では教師間の格差が大きくなるのではないかと懸念されている。
 - d. 教えるテーマが自分の専門でない場合、指導が難しいのではないかと懸念されている。
- これらの課題にどう対応したらよいのか、指導の方向性を考えてみたい。
- a. 学校の独自性をどう出すか
独自性を地域特性などで結び付けて

完全に「学校オリジナル」なものとするとなると、何をどう取り組めばよいか、非常に分かりにくい。学校の状況や環境、生徒の特性、属性などを総合して適切な教育目標、指導目標を設定することが、まずやるべきことだろう。

使う教材、資料などについても「学校オリジナル」にとらわれずに、既存の教材や資料をベースとしながら、指導方法によって学校の独自性を出すことは可能だろう。つまり重要なのは、その運用方法であると考えられる。

- a. 負荷がかかるのではないかと懸念されているが、すべてゼロから作り上げるのではなく、既存の情報媒体、教材などをうまく活用すれば、負荷はかなり減らすことが可能と思われる。
- b. 教師間格差が出るのではないかと懸念されているが、最初に指導案的なものを全体で作り、共有化することが大切だと思われる。盛り込むものとしては、指導目標、指導の上で押さえるべきポイントなどが考えられる。さらに、できれば生徒がその指導に対してどんなリアクションを示すか、それに対してどう指導していくか、までを想定したものにした。こうして教師間でコンセンサスを図っておくことで、指導の格差を最小限にとどめられ

るだろう。

さらに理想的な方法として、教師間で「総合学習」の模擬授業を行うことも考えられる。教科指導以上に「総合学習」に関しては教師全員で考えていくスタンスが求められる。いずれかの分掌がある程度は主導を取る必要があるだろうが、進路指導部など特定の分掌が引張っていくというような構図ではなく、学校、学年全体で考えていくことが大切だろう。

d. 教えるテーマが専門でない場合、どうしたらよいか

「総合学習」は教えることが目的ではないし、答えを出すことが目的でもない。当然、教師に知らないことがあることもよいはずだ。教師は生徒の研究を支援し、生徒と一緒に考えながら必要に応じてその研究の道標を示してやる、というスタンスで臨むことが求められるだろう。

生徒を主体的に活動させるカリキュラム作り

今後、多くの高校が「総合学習」の実施に向けて、具体的な検討を進めていくことになる。その検討過程として

学習目標例	具体的な学習活動例
現代社会の課題を自分に引き寄せて考えることにより、社会とどうかわりながら生きていくかを考えるきっかけを与える	1 脳死移植、ゴミ問題、高齢社会、インターネット犯罪など、社会におけるいくつかの問題を取り上げる 2 その問題の概要を把握させ、さらにそれに対する有識者や当事者の意見が書かれた資料などを読ませる
社会とどうかわるかといった幅広い視点から進路を考えさせる	3 自分だったら、その問題を解決に導くためにどのような手段を探るかを考えさせ、小論文として書かせる 4 その問題の解決に貢献できる職業や学問にはどんなものがあるか、その職業や学問の内容はどんなものかを調べさせ、進路に対する興味や知識を深めさせる

は、やはり「総合学習」全体の大きな学習目標をまず設定し、その目標に向けて生徒にどのような学習をさせていけばよいか、という学習活動を吟味するという流れが考えられる。

例えば、学習目標を「現代社会が抱える課題を自分に引き寄せて考え、幅広い視点で進路を考察できるようにする」と設定した場合について考えてみよう(図A参照)。その場合、国際環境、福祉、情報などに関する様々な社会問題の概要と論点を生徒に把握させることから始めてはどうだろう。そして、自分がその問題の当事者であったらどう行動するか、さらに、その問題の解決にどんな職業や学問で貢献した

いか、などを考えさせる、といった取り組みが挙げられる。

学習目標は、高校として「総合学習」で生徒にどのような力を身に付けさせたいかを考え、設定する。高校の状況に応じていろいろな目標が考えられるが、新学習指導要領にある「生きる力」

課題発見力、課題解決力、豊かな人間性など の育成にかかわるものをブリークダウンしていくと、一例として次のような学習目標が考えられる。

①現代社会や地域社会での出来事を自分化する(自分のこととして引き寄せて考えさせる)ことにより、社会とどのようなかかわりを持って生きていくかを考える。

②様々な課題・問題に対して、自分の意見や主張を持つと共に、それを第三者に正しく伝えることができる力を身に付ける。

③第三者の意見や主張に耳を傾けることにより、世の中に多様な価値観が存在すること、多角的なものの見方があることを理解する。また、自分と価値観の異なる人の意見を咀嚼し、吸収する力を身に付ける。

④視野を広げ、新しい知識を吸収することによって、自分の適性や興味

になっていないかを再確認し、必要があれば軌道修正する。

⑤将来への目的意識、進路意識を明確化し、それを充実した高校生活を送ろうという気持ちにつなげる。

⑥ニューメディアを活用した情報収集方法を身に付けると共に、多種多様な情報の中から自分に必要な情報を取捨選択できる力、情報リテラシーを養成する。

これらの中から生徒の状況、志望動向などを考え合わせながら、どれを学習目標の中心に据え、力を入れて取り組んでいくのかを決めていくとよいだろう。

大きな学習目標を設定したら、その目標の実現のためにどんなプロセスで指導していくのが最適かを考える。一例として次のような指導プロセスが想定できるだろう(図B参照)。

学習テーマの設定

「総合学習」の大きな学習目標が決まったら、大まかな学習テーマ(例えば「環境」)を設定する。この場合、生徒がより主体的に学習に取り組めるように、個々の生徒あるいはグループで取り組むさらに詳細なテーマ(例えば「ゴミ問題」)は、生徒自身に決めさせることができるような配慮をしてもよ

いだろう。

また、同じテーマを1年間通してやることも、どうしても間延びする心配がある。1学期1テーマとして、学期ごとに何らかの成果物を出すようにすると、その心配がない。

オリエンテーションの実施

「総合学習」の意義、目的をオリエンテーションの場で生徒に理解させることは、生徒の主体的な活動を促す上で不可欠である。この際、「生きる力、課題発見力」といった抽象的な言葉による説明だけで済まらずに、例えば今

社会がどのように動いているのか、その中で具体的にどんな力が求められるのか、といった問いかけ、社会的背景にまで踏み込んで説明したい。例えば、企業の採用活動の変化など実社会の動きを

示す資料を交えれば、より説得力が増すだろう。

生徒による学習計画の立案と発表
生徒の主体性を引き出すための仕掛けとして、テーマ学習の前に生徒自身に学習計画の立案をさせ、それを発表する場を設けてみてはどうだろう。生徒に「総合学習」で特に学び取るつもりでいること、目標に至るまでのステップ、スケジュール、役割分担、成果物のイメージなどについて計画書を作成させる。

そして、その計画をグループごとに発表し、質疑応答をさせる。これによって他者の意見を聞くことで学習に向けての視野が広がり、生徒個々の研究もより深まっていくだろう。

教師によるチェックと生徒へのフィードバック

学習テーマの設定
・大まかな学習テーマを設定。詳細な項目は生徒に決めさせる
・1年間で複数の学習テーマを設定する
オリエンテーション
・新しいテーマで学習を始める度にオリエンテーションを実施。「総合的な学習の時間」で学ぶことの意義を説明
・「体験的な学習を必ず盛り込む」などの学習上の条件があれば提示する
・オリエンテーションを受けて、さらに詳細な活動内容を生徒に決めさせる
生徒による学習計画の立案と発表
・詳細な目標設定、目標に至るまでにどのようなステップを踏むか、スケジュール、役割分担、成果物のイメージについての計画書を作成させる
・計画を作ったグループごとに発表させ、質疑応答をさせる
教師によるチェックと生徒へのフィードバック
・計画に無理がなく、提示した条件を満たしているかをチェックする
・役割分担などが適切に行われているか(限られた生徒だけが動く結果にならないか)をチェックする
実行、随時、途中経過の発表
・グループワーキング、体験学習、関係者への取材、講演会などを実施する
・締め切りを設けて、途中経過の発表をさせる
成果物の作成、発表
・結果レポートを冊子化したり、ホームページを作り掲載するなど、結果を目に見える形にする
次のテーマへ

ードバック

の後、さらに教師によるチェックを行うとよい。計画に無理がないか、提示した条件を満たしているか、役割分担が適切か、といったことをチェックし、生徒にフィードバックする。生徒自身に自分の計画を再検証させることで、「総合学習」が自分自身で作られているものであることを、生徒は改めて認識させられるはずだ。

学習活動の実行。随時、途中経過の発表

テーマについての学習活動が始まったからは、随時、途中経過を発表させる場を設けたい。教師にとっては進捗状況を確認する場となり、生徒にとっては適切なアドバイスを教師から受けることで、その後の活動への動機付けとなる。

成果物の作成、発表

成果物を冊子化したり、ホームページを作った掲載し、結果を見える形にすることで次へのやる気が高まり、また他者の研究成果を目にする中で、そのテーマや学習目標に対する視野も広がる。文化祭や、保護者・地域の参加を募っての発表会、さらに近隣の高校同士で同じテーマを設定しての合同発表会などにも取り組んでみたい。

「総合学習」のねらいを生かす生徒の学習活動

生徒自身の学習活動においては、いかに生徒自身に「自ら学んでいる」「新しい発見があった」という実感を持たせられるかが特に重要になる。そこで、図Aの学習活動例を基に、進路学習や小論文指導を盛り込んだ次の四つのような段階を想定し、生徒の学習活動について考えてみよう。

テーマに関する知識の習得
例えば、いきなり環境問題や国際問

題、自分たちの住む地域について研究すると、基礎となる知識がなければ課題を発見することはできない。

学習テーマを設定したら、新聞や書籍、インターネットなどを活用して知識を習得する場を設けることが必要だろう。

課題と解決策の発見

調べ学習と並行して、「何が問題なのか」「その課題に対してどんな解決策があるのか」をクラス集団の中でも考えさせていく。グループ討論、ディベート、KJ法など、他者の考えを知り、異なる意見を整理、集約していく活動を盛り込んで、学習のポイントを生徒個々に絞らせたい。

多様な価値観との出会い

クラス内でのグループ討論、ディベートなどに加え、さらなる多様な価値観との出会いの場として、施設訪問などの体験学習を取り入れると生徒の活動内容はより多様になり、深まっていく。他者の考えやこれまで知らなかった社会の実状を踏まえて、自分の意見を軌道修正しながら、よりよい解決方法を考えさせる。このような活動を通して、テーマに対する自分なりの意見や解決策を小論文として書かせてもよいだろう。

進路学習

ここまで学習したことを、自分の進路に結び付けさせる。そのテーマの課題の解決にどんな職業や学問が関係するかを、進路情報誌やインターネット、新聞などで調べることで、自らの進路への手掛かりやLHRなどで行われる進路学習の動機付けとしていく。

このように、「総合学習」では様々な観点の取り組みが積み重なった活動が考えられる。それは、「総合学習」が結果を出すことだけを目的とした学習ではなく、結果に向かうプロセスを生徒自身が体感し、その意味を学んでいく学習でもあることを示していると考えるだろう。

表C 学習目標と学習活動のマトリックス

<「総合学習」において、どのような学習目標と学習活動が考えられるかを整理したマトリックス。「総合学習」で考えられる学習目標を縦軸に、学習活動を横軸に置き、それぞれの学習目標を実現する上で、特に効果的だと思われる指導手段の箇所に記入>

社会の出来事を自分化し、社会とのかかわりを持って生きていくを考える					
様々な課題・問題に対して、自分の意見を持ち、それを他者に伝える力を身に付ける					
多様な価値観に触れ、その意見を咀嚼、吸収する力を身に付ける					
新しい知識を得ることで、自分の適性や興味の方性を再確認する					
進路意識を明確化し、それを高校生活への意欲へとつなげる					
ニューメディアを活用しながら、情報リテラシーを養成する					
etc.					

学習目標の例	進路学習	小論文指導	横断的総合的学習	体験学習	ディベート法など	教科横断的学習	etc.
学習活動の例							

高校の状況や生徒の特性によって、学習目標と学習活動のマトリックスは異なってくる。例えば、表の上から二つ目の「様々な課題・問題に対して、自分の意見を持ち、それを他者に伝える力を身に付ける」という学習目標に対応する学習活動として「小論文指導」や「ディベート・KJ法」などが考えられる場合、そのいずれを採用し、いずれに力を入れるかは、高校がそれぞれの指導目標に照らして決めることになる。したがって、究極的には高校ごとにマトリックスを作ることが望まれる。